

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 4 日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720387

研究課題名(和文) インド洋海域世界におけるオマーン移民のネットワークに関する人類学的研究

研究課題名(英文) Anthropological study on Omani networks in the Indian Ocean

研究代表者

大川 真由子 (Okawa, Mayuko)

早稲田大学・人間科学学術院・助教

研究者番号：70571818

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：インド洋海域のネットワークをオマーン移民の視点から解明することを目的とし、この3年間でオマーン的首都マスカットを中心に海外調査5回を実施し、オマーンと東アフリカのあいだを移動していた人々やその末裔にインタビュー調査を実施するかたわら、アラビア語資料の収集に努めた。それらの分析をもとに国内外で積極的に学会発表をし、日本語、英語双方で論文執筆をおこなった。インド洋西域における交易の主要な担い手であったオマーン移民のネットワークの歴史的展開と現状の一側面があきらかになったと考える。

研究成果の概要(英文)：I have conducted fieldwork five times mainly in Muscat, the capital city of Oman during the last three years in order to clarify the Omani network in the Indian Ocean. I interviewed Omani migrants between Oman and East Africa and collected Arabic documents concerning historical relationship between the two regions. Based on analysis of both interview data and documents, I actively presented my research results at both domestic and international conferences and wrote paper in both Japanese and English.

研究分野：文化人類学、中東地域研究

キーワード：オマーン 東アフリカ ザンジバル 移民 ネットワーク 歴史

1. 研究開始当初の背景

(1) インド、アラビア半島および東アフリカ沿岸部の地域間には、インド洋を舞台として2000年以上にわたる、人、モノ、情報の移動がみられ、海上交易による一大ネットワークが発達していた。インド洋交易研究は歴史学を中心に蓄積がある一方[e.g. Bhacker, M. R. 1992 *Trade and Empire in Muscat and Zanzibar: Roots of British Domination*. Routledge]、人類学的研究は極端に少なく、オマーン移民に関する人類学的研究は申請者による業績をのぞくとごくわずかであった。申請者はこれまでオマーン移民の中でもとくにオマーンへ帰還した人びとを主要な対象として、アラブ性とアフリカ性をキーワードに彼らのエスニック・アイデンティティを考察し、その成果は単行著として2010年に刊行した『帰還移民の人類学——アフリカ系オマーン人のエスニック・アイデンティティ』(明石書店)

(2) 本研究が注目するオマーン移民は、オマーン帝国の拡大に伴い、1830年代以降ザンジバル島をはじめとする東アフリカに移住し、脱植民地化の過程の中で1970年以降本国に帰還したり、そのまま東アフリカに残留した人びとで、図1の網掛け部分がおもな移動範囲である。

東アフリカにおけるオマーン移民はこれまで西洋の歴史家からコロニスト、侵略者として本質化した形で表象され、オマーン移民が統治していたザンジバルは、アラブ／スワヒリという「人種」に分化される社会として描かれてきた[e.g. Coupland, R. 1938 *East Africa and Its Invaders*. Oxford University Press]。だが、申請者は東アフリカ出身のオマーン人との聞き取りを重ねているうちに、また近年オマーンで出版されているザンジバルの歴史書やアフリカ出身者の自伝を読み進めていくうちに、こうした表象は現地民との良好な関係を強調しているオマーン移民側の言説とは内容を異にしているのではないかと思うようになった。

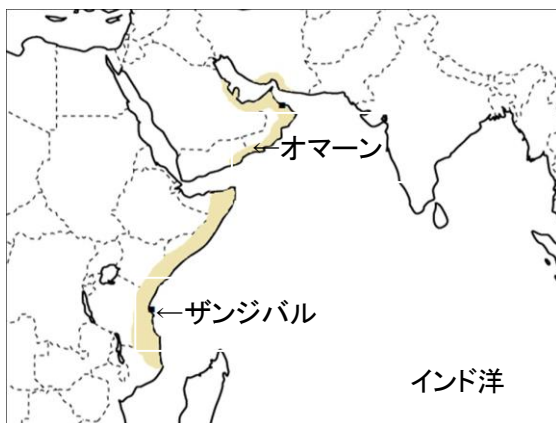


図1 インド洋西域、オマーン帝国版図
(網掛け部分)

2. 研究の目的

以上のような論点を受け、本研究では、インド洋海域のネットワークをオマーン移民の視点から解明することを目的としている。申請者がこれまで従事してきた本国に帰還したアフリカ系オマーン人を中心とした研究に、東アフリカのオマーン移民(19世紀前半～現在)という新たな対象を加えることで、これまで等閑視されてきたオマーン移民をインド洋海域ネットワークの中に位置づけ、多角的視点から両地域間のネットワーク理解を目指す。帰還後のみならず数世代前のアフリカ時代も含めた通時的考察や、アフリカ残留組との現在のネットワーク分析なしには、オマーン移民の全貌を把握することはできないからである

3. 研究の方法

上記の目的から、本研究が扱う時代と地域は18世紀に始まるオマーン統治期から、1890～1963年のイギリス植民地期にわたるザンジバルおよび東アフリカ大陸部と、現代のオマーンおよびアフリカとなる。本研究では、ライフヒストリーや口承といった民族誌的データに、史料批判を組み合わせた歴史人類学的方法から、オマーン統治期、イギリス植民地期を通じて、民族や宗教・宗派、国家という多元的境界に絡められつつも、オマーン移民がさまざまな局面でフレキシブルでグローバルなネットワークを作り出してきたことを明らかにし、オマーン移民からみたインド洋海域ネットワークの新たな側面を解明したい。

4. 研究成果

本研究の成果は以下の2点が挙げられる。

(1) オマーン移民の帝国意識の解明

当初予定していたアフリカ調査が諸般の事情により実現できなかったため、「現代オマーン人にとってザンジバルあるいはオマーン帝国とは何だったのか」という問題に取り組んだ。おもに2つのテーマに分かれる。

①「オマーン帝国」が現代オマーンでどのように表象されているのかを、国定の社会科教科書と指導教本の記述から分析を試みた。なぜなら国家の歴史は社会科に含まれており、公立私立を問わずすべての学校において統一の社会科教科書が使われていることから、オマーンにおいて教科書の権威は高く、オマーン人の歴史認識に何らかの影響力をもつと推測されるからである。

教科書では、オマーンの領土を最大化にした君主サイドが英雄として描かれ、その領土が「オマーン帝国」として説明されている。「オマーン帝国」という名称・概念

は、1970年以降に普及した近代教育制度のなかで創出され、定着していったものではないかと申請者は思い至る。というのも、政府は1970年に生まれた「オマーン人」が共通して誇れるようなオマーン帝国という過去の栄光を設定し、ナショナル・アイデンティティの源泉のひとつとして普及させたからである。申請者は、政府が現在でもメディアやアカデミックな場を通じてその概念を積極的に再生産していることを明らかにした。

本研究の独創性は、これまで分析対象にされてこなかった指導教本（教師のガイドブック）を分析の対象に含めた点である。本テーマについては、2014年5月の日本中東学会にて発表し〔学会発表②〕、英語論文として投稿、『日本中東学会年報』に採択が決定している〔雑誌論文①〕（2015年夏刊行予定）。

②ここ数年活発化しているザンジバルに関する歴史書や、アフリカ出身者による自伝出版を受け、帝国内部を移動していたオマーン人がオマーンによる東アフリカ統治をどのように認識しているのかを、1990年代末に入る頃から出版されるようになった彼らの自伝やザンジバルの歴史書、さらには筆者がおこなったインタビュー資料から明らかにすることを目的にした。

東アフリカ出身のオマーン人による出版物や語りにもみられる主張点は、

1. オマーンとヨーロッパによる統治方法の違い（オマーンはアフリカ現地からの要請でアフリカ統治をしたという主張）
2. オマーン統治によってザンジバルに繁栄がもたらされたという考え方
3. オマーン統治は植民地支配ではないので、ザンジバルはオマーンの植民地ではないという解釈
4. オマーン統治時代におけるスワヒリとの共存共栄、友好関係の強調

オマーンとザンジバルの関係は、植民者／現地民あるいは支配（抑圧）／被支配（被抑圧）のなかで理解されてはならず、両者は少なくともオマーン統治時代には友好関係にあったこと、そしてザンジバルはオマーン帝国の一部であったと認識されていることが明らかになった。

人類学では帝国が主要な研究主題とされてこなかった。むしろ植民地研究として、植民地主義を現地人の視点から考察するスタンスがとられてきた。そこでは支配・抑圧・中心／被支配・抵抗・周辺という二項対立的図式が再考されたことは成果として評価できるが、これまで人類学が注目してきたのはおもに被植民者であり、植民者（支配者）が問題化されることはさほど多くはなかった。

これに対し、本研究は人類学において焦点を当てられてこなかった支配者層の視点から、東アフリカの歴史を見返すことで、人類学における帝国研究あるいは帝国史研究に興味深い事例を提示できたと考える。支配者層でありながらもその地位は脆弱で、支配と被支配の境界はかつ不安定であること、おもにヨーロッパの歴史家によって書かれたザンジバル史やオマーン移民に対する支配者のイメージを払拭すべく文筆活動をするオマーン移民の姿が浮き彫りとなった〔雑誌論文②〕。本テーマについては、当時の所属先である東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所内の共同研究会などにおいても複数回発表した。

2) インド洋における移民との比較を通じたオマーン移民ネットワークの特質の解明

①湾岸アラブ諸国の人口約半分を占める移民労働者とホスト社会との関係を、オマーンにおける人類学的調査のデータから明らかにすることを試みた。従来の研究では移民労働者と湾岸国民との断絶した関係が指摘されていたが、申請者は移民側の主体性に注目することで、ホスト社会との交渉を明らかにした。受け入れ国の政府もメイドの逃亡や移民の国籍取得を阻止すべく法を改正する一方で、移民側も頻繁な転職などで「抵抗」を試みており、両者の交渉の様子が浮き彫りとなった。本調査の結果については、2014年12月マレーシアの国際学会にて発表し〔学会発表②〕、同年度末に英文の報告書として刊行された〔図書②〕。

本研究の対象であるオマーン移民も、南アジア系出稼ぎ移民も1970年以降オマーン社会に登場した人々である。にもかかわらず、オマーンにルーツをもつ前者はオマーン国籍を付与されたのに対し、後者は国籍法によってオマーン国籍は付与されず、当人たちも申請するつもりはない。こうした「国民」と「外国人」という法的立場の差が経済的格差として現れているが、外国人である出稼ぎ移民側もただ能動的にオマーンの労働政策に翻弄されているばかりではないことを本研究ではあきらかにした。

さらには、オマーン移民や南アジア系の出稼ぎ移民など、移動の文化が作り上げるオマーン的生活世界について、申請者がこの3年間で実施したフィールドワークで遭遇したさまざまな出来事から考察し、オマーン社会のコミュニケーションのあり方について描写した〔図書①〕。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

① Mayuko Okawa, *The Empire of Oman in the Formation of National History: An analysis of School Social Studies Textbooks and Teachers' Guidelines*, *Annual of Japanese Association of Middle East Studies*. 査読有、(採択決定)

② 大川真由子、ザンジバルは植民地だったのか——東アフリカ統治をめぐるオマーン人の歴史認識、*人文学報*、査読有、483号、2014、51-67.

[学会発表] (計 2 件)

① Mayuko Okawa, *Transnational Migrant Workers in Arab Gulf Countries: Bargaining between the Host Country and Expatriates in Oman, Islam and Multiculturalism: Exploring Islamic Studies within a Symbiotic Framework*, *Asia-Europe Institute, University of Malaya, Kuala Lumpur, Malaysia*, 2014/12/14.

② 大川真由子、オマーン帝国と国史形成——オマーンの国定社会科教科書と指導教本の分析から、*日本中東学会第30回年次大会*、*東京国際大学* (埼玉県川越市)、2014/5/11

[図書] (計 3 件)

① 大川真由子 他、*悠書館、<断>と<続>の中東——非境界的世界を遊ぶ*、2015、3-31

② Mayuko Okawa et.al, *Islam and Multiculturalism: Exploring Islamic Studies within a Symbiotic Framework*. *Organization for Islamic Area Studies, Waseda University*, 2015, 45-49

③ 大川真由子 他、*明石書店、現代アラブを知るための56章*、2013、320

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大川真由子 (OKAWA, Mayuko)

早稲田大学・人間科学学術院・助教

研究者番号：70571818